

心に届け 私の言葉

青少年主張大会・標語表彰

子どもたちの健全な育成を願う第23回只見町青少年健全育成主張大会・健全育成標語表彰式が、1月24日只見地区センターで開かれ、聴衆の心を豊かにしてくれました。



主張大会では、小学生3人、中学生3人、高校生2人が、自分の体験や考えを発表すると、会場に集まった約120人の聴衆から大きな拍手が送られました。

標語表彰式では、町青少年健全育成町民会議会長の目黒吉久町長が、入賞者一人ひとりに賞状と記念品を贈りました。標語には町内から339点の応募がありました。

今月号では、主張大会で発表された内容と、入賞標語を掲載します。青少年の主張に耳を傾け、標語に触れていただき、青少年の健全育成にご理解ご協力をお願いします。

なお、健全育成事業は、町民のみなさまの協賛金により運営されています。

標語入賞作品 (敬称略)

【小学生の部】

◎優秀賞

「はなそうよ 今日の出来事 食卓で」
明和小6年 馬場 光弘

▽佳作

「ごめんねと 言える勇気は 大切だ」
只見小5年 島谷 拓実
「忘れるな 地球のさけび 聞く心」
朝日小5年 渡部 早紀
「あいさつは 地域を結ぶ 小さな芽」
明和小5年 大竹 羽未
「良い言葉 使えばみんな 良い気持ち」
明和小5年 一条 英昭

【中学生の部】

◎優秀賞 該当なし

▽佳作

「ありがとう 感謝の気持ちを 忘れずに」
只見中1年 長谷川将樹
「町中が 笑顔であふれる 只見町」
只見中1年 鈴木ひかり
「おはようで 未来がひろく 只見町」
只見中2年 一条みずほ

【高校生の部】

◎優秀賞

「ありがとう」 ごめんねよりも
この言葉」
只見高1年 山内 麻椰

▽佳作

「あいさつで 広がる世界 地域の輪」
只見高3年 五十嵐志乃
「いつまでも 変わらぬ人の 温かさ」
只見高3年 馬場 美里
「美しい 自然とともに 歩む町」
只見高3年 鈴木加奈子

【一般の部】

◎優秀賞

「教えよう 強さ優しさ 厳しさを」
長浜 吉津 禮子

▽佳作

「人の道 わが子に示せ 一步から」
蒲生 馬場 新介
「ありがとう 五文字にこもる 温かさ」
福井 渡部ユキ子
「あたたかく 見守り続ける 地域の目」
蒲生 五十嵐八恵



なぜ ニートを選ぶのか

只見小学校 6年

すず
鈴

き
木

あい
愛さん

「自分は、なんてダメ人間だろう。」
「自分は生きていく意味がない。」と……。
これは、先日、見ていたテレビで、
若い男の人が、ぐったりと肩を落とし、
落ち込んで何もできずに、部屋にこもっ
て話していた言葉です。

近年になって、フリーターよりさらに
に深刻な存在として、ニートが注目さ
れています。フリーターとは異なり、
就職する意志がなく職業につくための
訓練もしていない若者が大変多いとい
う現実、私は、心が痛みました。夢
がたくさんつまっている、希望を現実

に変えることができる、若いパワーを
もっているはずなのに……。考えるこ
とができる、動くことができるパワー
をもっているはずなのに……。なぜ、
ニートになってしまったのか。

働ける若者が、なぜ仕事を探さない
のか。働こうとしないのか、生きてい
かなければいけないのに。家が裕福な
家庭なら大丈夫でしょうが、定期的な
収入がないという状態では、精神的に
もつらいだろうし、生きていくための
衣食住に困るといふ事態が発生してし
まうのではないかと心配です。

生きるために働くという、夢も何
もないような感じがしますが、生きて
いくためには、最低限のお金が必要だ
と思います。ニートの生活を考えると、
ぜいたくで、のん気なことをしている
などと思う人が多いかも知れません。し
かし、私は、ニート生活を送っている
若者が、精神的にとってもつらいのは
ないかと思いました。
「自分が、本当にしたいことは何なの
か」

と『自分探し』をしているうちに、
「この先どうやって生きていけば良い
のだろうか」

と、悩み苦しんでいるんじゃないかと
思うのです。だから、私は、脱ニート
を応援していきたいと思えます。何か
物事をやろうとすることを応援するた
めに、どうしたら良いのかということ
を考えていきたいと思えます。

脱ニート！ 当たり前ですが、何も
やらないでいる人には、成功はありま

せん。目標を達成するために、目標を
書きとめる人のほうが、そうしない人
よりも目標達成率が高いそうです。こ
れは、やってみる価値あり！ 目標が
明確になるし、計画も立てやすい……。
目標の立て方は、大きな夢や目標を持
ち、これを達成するために、自分がで
きる範囲の目標を立て、毎日、少しづ
つ実行していく……。無理な目標を立て
ることはいけないと思えます。目標を
達成するには、時間がかかる場合が多
いです。いきなり大きくとび出すので
はなく、ゆっくり歩きながらやってい
くことも肝心になってくるでしょう。
目標達成や、成功後には、忍耐力もつ
きますし何よりも自分に対する信頼、
自信を得ることができるとはいいか
と思います。

考え方としては、自分が他人の考え
方を変えるのは難しいように、他人か
らいろいろ言われて、自分を変えるとい
うのは、難しい気がします。自分か
ら自分の考え方を変える方がはるかに、
簡単ではないか。

「何かを変えたい、未来を変えたいと
思いながらも「それは、自分にはでき
ないし」とニートの人は口をそろえて
言います。「それは自分にはできない。
(けど、やってみよう！)」

などと、真意に思っている場合もある
んじゃないか。やってみようという気持
ちが出てくるのではないかと思えます。
自分の考えや言葉に注意することも大
切なこと、脱ニートに近づくことだと
思っています。

まずは行動を……。行動を起こすこ
とです。「考えて行動すること」と
「行動して考えること」がありますが、
考えてから行動すると、考えすぎて、
一歩目が出ない場合があるのではない
でしょうか。まずは、行動を起こし、
「やるか、やめるか」などの選択肢が
増えた後、気持ちの整理のために考え
た方がいいのではないかと、私は思い
ます。自分は、どんなことに向いてい
るのか？ それを見つけてため、まず
は、いろんな情報を持って、いろいろ
知ることによって選択肢を増やすこと。
そして、その選択肢の中から、自分に
合いそうなもの、興味が少しでもあり
そうなものからチャレンジしてほしい
です。

自分のことを、なんてダメ人間なん
だ、生きていく意味がないなんて、絶
対に思ってしまうし、もっと自分
を大切に、夢を持って、目標を持って
生きてほしいです。私は、将来、生け
花の先生を目指しています。小さい頃
から、よく花をつんでかざったり、そ
れを見て楽しんでました。生
け花の先生はいろんな花で、いろんな
風に表現して、人の心や、建物の中を
ぱあーっと明るくできる、まほうの職
業です。ニートで苦しむ若者のみなさ
んも、私ぐらいの頃は、こんなすてき
な夢を持っていませんでしたか。夢を
持ち、実現するために、どんどん積極
的に行動し、現代社会に勝っていきま
しょう。



朝日小学校6年

増田奈歩さん

あたりまえじゃない

あたりまえのこと

とつ然ですが、みなさん、ちょっと息を止めてみてください。息を止めると苦しいですよ。わたしたちは、いつも呼吸をしています。呼吸が生きるために、どんなに大切か、呼吸ができなくなったらどうなるのかなんて、考えもしません。呼吸をすることは、あたりまえのことだと思っています。

六年生になった春、遊んでいたわたしは、急に足が痛くなりました。少し休むと治まったけど気になって、次の日、病院に行きました。すると、お医者さんから、こ間接の骨が少し変わった形で成長していて、それがこすれて痛くなるのだらうと言われました。そして、しばらく激しい運動はしない方がいいということも言われました。

それからは、朝のマラソンや体育の授業はほとんどできず、運動会の練習にも少ししか参加できませんでした。スポーツのバレーボールも、足を多く使うので、パスの練習を少しやるくらいで、見学することが多くなりました。運動は得意じゃないけれど、決ま

らいではありませんでした。(六年生になって、運動会もバレーボールも、精一杯がんばっていたいい思い出を作ろうと、はりきっていたのに、どうして急に、できなくなっちゃうんだらう。) そう思うと、くやしくてさびしくて、(動けるときに、もっともつとやっておけばよかったなあ)と、後かいたのです。

それでも、両親や先生と相談しながら、できそうな運動をやって、運動会にも参加できました。いくつも病院をまわって、運動をしなくても、治り方に大きな違いはないということ、痛くなったら休むという条件つきですが、秋の終わりに、元通り、運動することができるようになりました。もちろん、前よりも一生けん命がんばっています。

そうして、わたしが運動できることが、あたりまえにもどったころ、国語の学習で、平和について調べて、自分の考えたことを発表するという活動がありました。わたしは、戦争がないこ

とが平和だと思い、戦争のことを調べてみました。すると、普通に生活していて、何も悪いことをしていないのに、戦争に巻きこまれ、食料も家もないような人が、たくさんいるということが分かりました。また、戦争が終わっていても、残された地雷で遊んでいた子どもが大けがをしたり、死んでしまったりしているということも、本にのっていました。本当に、こわいことです。

今、日本は、食べ物がたくさんあって、住む家もあります。地雷の心配もなく、安心して歩くこともできます。空からばく弾が降ってくることも、まず、ありません。平和だと思います。

でも、約七十年前は、日本も平和では、ありませんでした。今はあたりまえな平和も、昔は、あたりまえじゃなかったのです。戦争を反省し、平和にしようとする努力をしてくれた人たちがいたから、今、わたしたちは、平和に暮らすことができるのです。

わたしは、自分が運動できなくなつて、思いきり動けることが、とてもうれしいことだと気がつきました。国語の学習をして、平和な日本にいたことが、とても幸せなことだと感じました。そして、二つのことから、今まであたりまえだと思っていたことも、決してあたりまえじゃない、変わってしまったかもしれないことなのだと思います。だから、わたしは、運動できること、平和に暮らせること、今、ここで自分の意見をみなさんに聞いてもらえること、いろいろなことを大切に思つて、

過ごしていきたいと思えます。もちろん、あたりまえに呼吸をして、生きていられることも。



私と明和小学校

明和小学校6年

山内香純さん

今から四年前、私は三年生のときに埼玉県からこの只見町に引っ越してきました。雪がたくさん降ることは両親から聞いて知っていましたが、実際に今までに見たことがないほどの雪を見て、とてもびっくりしたことを今でも覚えています。緊張しながら初めて明和小学校へ行った日。教室にはたった十一人の友だちしかいませんでした。

それまで三十人以上もいた教室との違いに、また、おどろきました。しかし、この小さな明和小学校で、私はたくさんの心に残る経験をする事ができました。

転校してすぐに運動会がありました。

三年生の私は鼓笛隊で鍵盤ハーモニカの演奏をすることになりました。本当にできるようになるのかとても不安でしたが、クラスの友だちや先生、上級生たちがやさしく教えてくれ、なんとか運動会には、みんなと一緒に演奏することができました。明和小学校の鼓笛隊は一年生から六年生まで全員が参加します。七十名ほどの子どもたちが全員で一つの事を完成させるということがとてもすごいことだと思いました。そして、上学年のお兄さんやお姉さんが下学年の人たちに教えていくという伝統もすばらしいと思いました。私も、もうすぐ来年度の新しい鼓笛隊に向けて、四年生に小太鼓の演奏を教え伝えることとなります。今までの卒業生がしてくれたように、明和小学校の伝統と演奏を伝えてあげたいと思っています。

四年生からの三年間は、三十人三十一脚に取り組みました。これは私にとってもみんなにとっても忘れられない経験になりました。みんなで足をつないで走ることができた喜び、負けてくやしい思いをしたこと、友だちと助け合っ

て練習したことは、きっと他ではできなかった、すばらしい経験でした。四年生の冬、また新しい経験をする

ことになりました。それはクロスカントリースキーです。雪の経験も少ない私がかんなスキーができるようになるのか、不安でいっぱいでした。その年は、やはりフリーもクラシカルも思うように滑ることができず、くやしい思いをしました。五年生になってからは少しづつこつをつかみ、滑ることができるようになりましたが、それでも周りの友だちよりは上手ではないな、感じる事がありませんでした。しかし、みんなが一生懸命練習に取り組んでいる姿を見て私もがんばろうと思い、練習しました。昨年はリレーのメンバーにも選ばれ、自分なりに精いっぱい滑ることができました。そんな私が、今年、クロスカントリースキーの副キャプテンをすることになりました。滑れるかどうかでも不安だった私が副キャプテンになったことに、自分でもびっくりしました。でも、今までがんばってきた気持ちと友だちの支えを力にしながら、六年生としての責任を果たせるようにがんばろうと思っています。

今は、こんなふうに「六年生としての自覚を持つ」と思えるようになりましたが、六年生になったばかりの四月、私にはまだまだ最上級生という意識はありませんでした。運動会では低学年の面倒をみる仕事をしました。三十人三十一脚では三年目で、私たち六年生が四年生や五年生を引っ張って全国大会へ行くんだ、という気持ちでがんばりました。児童会では運営委員長として、児童の代表なんだ、という意

識を持って活動する機会が多くありました。こんなふうに、今までの十ヶ月間に、この明和小学校で経験したたくさんのことが、私を少しずつ六年生らしくしてくれただのだと思います。もうすぐ、明和小学校の新校舎が完成します。残念ながら私たち六年生は新校舎で学習することはできないけれど、新しい校舎の教室にかける看板、つくりなどで参加することができました。



只見中学校1年
中野 翔さん

みんなの願いが形になるのがとても楽しみです。

私は明和小学校の旧校舎で、みんなよりは少し短い四年間を過ごしました。不安だったこともうれしかったことも今の校舎との忘れられない思い出です。卒業までもう少しになりました。この明和小学校の古い校舎と、もう少し楽しい思い出をつくりたいと思います。

野球を通して

去年の夏のことです。県営あづま球場。この日の第二試合、僕はライトスタンドで只見高校の応援をしています。対戦相手は名門いわき高校。両者二回に二点ずつを入れ、その後延長戦に入りました。そして十四回裏、いわき高校に一点を取られサヨナラ。只見高校は負けてしまいました。

強豪校相手に五分五分の試合をした只見高校は、かなりの練習をしたのでしよう。努力をしたから、いい結果を残せたと思います。僕はこの試合を見て、僕たちも負けていけないと思い

ました。

夏休みの練習は、毎日午後まで続けました。午前中は全体練習。午後は自主練習です。バッティングマシン二台を使い、打ち込みを行いました。今年はとても暑く、僕は、このつらい練習を乗り越えればきっと結果も出せると思いました。

そして、迎えた新チームとして最初の大会。チームは郡大会を順調に勝ち上がり、会津大会を迎えました。初戦の相手は春の大会で負けた本郷中学校。相手のエラーもあり、会津大会初の一

勝をあげることができました。続く準決勝は若松四中、決勝は若松三中でした。いずれも若松市内の強豪校です。しかし僕たちはその学校に勝ち、優勝することが出来たのです。

僕もこの大会、レフトで試合に出させてもらうことが出来ました。とても緊張しました。一生懸命声を出しました。特に決勝戦は雨の試合でした。五回ツーアウトランナー二、三塁で打席が回ってきました。僕はファーストフライでした。打っていけば点が入ったはず。申し訳ない気持ちで一杯になりました。試合は最終回までもつれました。最後は二年生の活躍で最終回サヨナラ勝ちです。打てなかった分、カバールてくれた先輩達には感謝の気持ちがあふれました。チームの弱い部分のみなどで補うのが、野球の良いところだと思います。僕もチームメートのカバールが出来ると選手を目指したいと思いました。

県大会は負けたチームの気持ちを考えると適当な試合は出来ません。一回戦の相手は郡山一中。民報杯という大会で、県大会優勝チームです。初戦から強豪チームです。

初回、守りについた只見は、試合開始のサイレンの直後、初球レフトオーバールのエンタイトルツーベース。いきなりのピンチに、エラーも出てあっさり一点を取られてしまいました。この一点が響き、そのまま一対〇で負けしまいました。僕は先発メンバーではなかったのですが、精一杯応援やサポート

をしました。最終回に守備で出る機会をもらいました。裏の攻撃も二死ランナー無しという場面で僕の打席です。しかし、監督は僕のところで代打を起用しました。僕の気持ちは複雑でした。「僕で凡退したらチームは負ける。」

そんな弱気を感じ取られてしまったのかと思います。でも、代打を告げられたときはショックでした。結局、最後の打者も三振に終わり、初めての県大会は終わりました。何も出来ないまま試合が流れていった、そんな何か無力さを感じさせる試合でした。

きっとこれは野球の神様が与えてくれた試練だったのでしょ。この苦い経験は、僕自身にもチームにとっても大きな経験でした。試合後、ミーティングでこの試合何をすれば良かったのか考えました。

「勝ちたい気持ちが足りなかったのか。」
「緊張していたのか。」
「ゲームの流れ、勢いに乗り切れなかったのか。」

そして結論は、「自分たちの野球」がどういう野球なのか。「どういう野球をしたいのか。」目標がないまま試合をしていたことです。

それからチームに変化が現れました。まず僕は、「大事なところでも替えられたくない。」という意識が強くなりました。チームも、練習に対する意識が変わるのを感じました。強豪チームと対等に戦えたことも自信にもなりました。「次は絶対勝つ！」という気持ちも出てきました。

ちょうど一カ月後の福島県中学校新人野球大会。僕たちは県大会の決勝戦に臨んでいました。相手は因縁の郡山一中です。最終回、エースの大竹大和君が最後の打者を三振に取りゲームセツト。前回の試合をそっくりそのままお返ししたような試合でした。

表彰式に臨みながら、「自分たちの野球」が少し見えたような気がしました。これからは「自分たちの野球」を追い求め、野球の道を歩いていきたいと思えます。

只見中学校は周りに野球チームも少なく、町場からも離れているので、練習試合も思うようにできません。でも、「これで練習試合の申込みがふえる。」春になればこの町に、たくさんの中学校在りやってくる。

「大好きな野球がたくさんできるようになる。」
「と思います。」

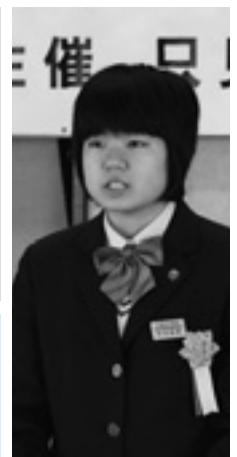
がんばれば、がんばった分だけ、よい結果につながることを野球を通して経験することができました。また来年も、たくさんの人に応援してもらえような野球をしたいと思えます。ご静聴ありがとうございます。



郷土料理への思い

只見中学校 2年

ほん 名 奈 菜 さん



凍み餅、笹巻き、そば焼き餅。これは、私の好きな食べ物です。私のばあちゃん、毎年冬になると凍み餅を作ってくれます。近所の人も、おいしい凍み餅ができる、それを持って来て一緒に食べたりします。凍み餅の味も、豆が入っている物や、油で揚げたものなど、一軒一軒違うので、とてもおいしいし、おもしろいです。

でも、そんな中でも食べることでできない物があります。それは「いずし」です。そのいずしを、私のお父さんは「うんめえな。」

と言って食べます。私はまだ分かりませんが、お酒を飲む人にとっては、たまらない味だそうです。

私は小学校まで、郷土料理なんて「田舎の食べ物」くらいとしか思っていないものでした。特においしいという食べ物でもないし、何より、カレーやハンバーグのような豪華なイメージと現代風の感じがないからです。

けれど、中学校に来てからは、考えが全く逆になりました。きっかけは、一年生の時の総合学習です。それで只見について調べることになったのです。只見の動物に植物、文化や方言など、たくさんの題材の中から、私は「郷土料理」を選び、調べることにしました。

私以外に郷土料理を選んだ友達はい意外に多く、分担して料理を探すことにしました。その中には、私が知っている食べ物がたくさんありました。その中の一つが、大晦日に食べる「お平」です。凍み餅のように好んで食べることもなかったのですが、栄養的にバランスの良い健康食だと知りました。バランスまでちゃんと考えて作ってあるなんて、郷土料理は田舎の食べ物だと思っていた私には、衝撃的でした。昔は、栄養を分析する機械なんかはなかったはずですから、それなのに、バランスがとれた食品を作り出したのか、とても不思議です。きっと、手間ひまをかけて、おいしく、尚且つバランス良く作り出されたのでしょう。魚を干したり、発酵させたりと、大変だったと思います。

この話をする時、「何でいろいろと便

利になった今も、郷土料理を作っているの。別に、手間がかかるなら、必要ないんじゃないの。」と考える人が出て来ると思っています。私もそう思っています。小学校までは。でも今、よく考えると、「本当になくしても良い物なのだろうか。」という疑問がわいてきます。郷土料理というのは、その町の歴史だと私は考えます。その歴史を私達の代で途絶えさせてもいいのでしょうか。便利なものがない昔に、一生懸命考

え、作り出された郷土料理。そんな簡単に私達がなくしていいとは、全く思えません。一つの郷土料理には、たくさんの町の暮らしや文化が詰まっているのです。

だから私は今、郷土料理をおいしく食べるのではなく、自分でも作ってみようと考えています。そうすれば、郷土料理を食べる楽しさや、大変さが分かると思います。それに、現代の食べ物とは違う温かさ、嬉しさなどを見つけ出せるのではないのでしょうか。いつか大人になって、見つけ出した物を、今度は私がみんなに伝えていきたいです。そのために、今のうちから、給食やお祭りなどを通して、郷土料理とたくさんふれ合っていこうと思います。そうしていけば、私はもうこの大切な料理を「田舎の食べ物」だなんて思わなくなるでしょう。むしろ、「先祖代々の秘伝の味」と考えるかもしれない。みなさんもこの奥深い郷土料理を、私と一緒に追求してみませんか。そして、ばあちゃん。今度私に、笹巻きの作り方を教えてね。



只見中学校3年
目黒紗智さん

ありがとう

みなさんは「ありがとう」という言葉を使ったのはいつですか？人は、誰かに親切にしてもらったとき、心から感謝の気持ちを表現します。私はずい分、心を込めて「ありがとう」と言っています。細かなことで「あっ、あなたが」とか「どうもどうも」などと、何気なく使っています。心から感謝の気持ちを込めて「ありがとう」とは言わなくなりました。もしかすると、言えなくなってしまうのかもしれない。

自分からは言わないのに、周りからは言ってもらえます。周りの人がどんな気持ちになるのかは、だいたい想像がつかます。このままではいけないと思いつつも、相手の目を見て真剣に「ありがとう」と言うことに恥ずかしさを感じるようになりました。「ありがとう」という言葉はとても便利な言葉だと思えます。相手の気持ちをよくするだけでなく、自分の気持ちまで晴れやかにさせてくれます。そんなたった一言がなかなか口から出てこなくなっ

ていました。

でも、あるテレビ番組を見て、私の考えはひっくり返されました。それは白痴病で亡くなった歌手の本田美奈子さんの特集番組でした。本田さんは、入院して辛い治療が続いても笑顔を絶やさず、逆に周りの人を元気づけていたそうです。その本田さんが、亡くなる前に『ありがとう』という詩をつきました。その詩の中には、

「誰かに感謝することで自分に喜びが生まれている。」

という文が出てきます。感謝する喜びや生きている喜びをかみしめて書かれているように感じました。私は、死を目の前にして、こんなに平静でいられるのだろうかと思いました。きっと死への恐怖と不安で、ふさぎ込んでしまふと思えます。また本田さんは、その詩の最後を

「ありがとうよ ありがとう」

という言葉で締めくくっています。この言葉で、完全に私は考え方を改めました。「ありがとう」という言葉で、

人の喜びや感謝の気持ちはつくられることもあるのだと素直にそう思い、大切なことなのだという事に気づかされました。本田さんは亡くなるまで、この「ありがとう」という言葉を大切にしていただと思うと、この言葉のもつ偉大さを感じます。感謝の気持ちだけでなく、生きる勇気さえも与えてくれるのだと思います。今、私は、心からの「ありがとう」を、今まで言いたくても言えなかった人たちに伝えたいという気持ちになりました。

そんなに大切な「ありがとう」という言葉を、恥ずかしいからとか、照れくさいからなどという気持ちで言えなかった自分が逆に恥ずかしく思えてきました。まだ面と向かって言うのは恥ずかしいかもしれませんが、感謝の気持ちを表現する第一歩として素直に伝えてみようと思います。

世界に「ありがとう」という言葉のない国はないはずです。意味や使い方も全世界共通だと思っています。言葉は違っていても、世界の国々の「ありがとう」という言葉の響きやニュアンスは、必ず伝わると思います。感謝の言葉が聞こえる場所で生活できたら、きっと一日一日をすがすがしい気分でするはずですよ。そのためには、まず身近にいる友人や家族に、笑顔をつくる魔法の言葉をかけてみようと思います。

私を支えてくれた友だち、いつも応援してくれている家族、本当にありがとう。ご静聴ありがとうございました。

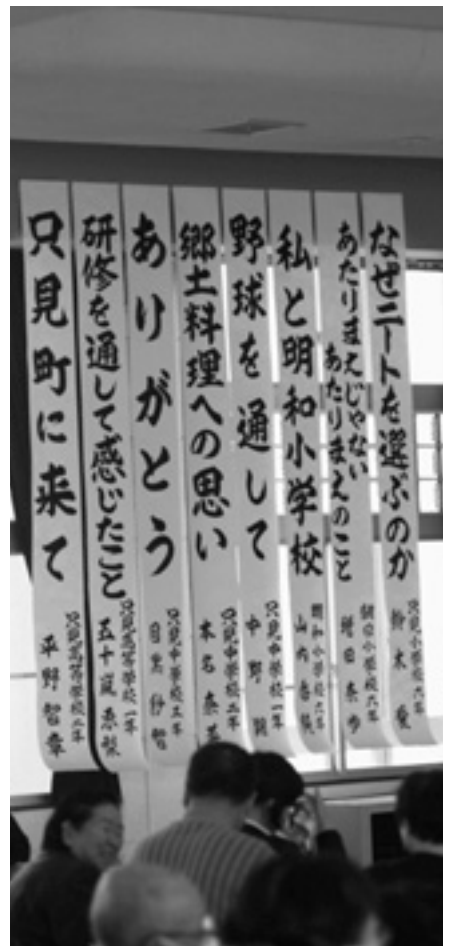


研修を通して 感じたこと

只見高等学校 1年
五十嵐 梨さん

私は今年の夏休みに南会津高校生徒台湾視察研修事業で台湾に行ってきました。田島高校から二名、南会津高校から二名、そして只見高校から私が参加し、五名の高校生を含む十二名が台湾の学生と交流してきました。

私は今回の研修で感じたことがあります。まず、日本の学生と台湾の学生の積極性の違いです。台湾の学生との交流で、二人ペアで話す時間がありました。その時に私や、一緒に行った他の高校の生徒は、質問に答えるばかりで一つの質問が出来ませんでした。特に台湾の



生徒と初めて話した時は、質問されると答えていましたが、会話が途切れると同じ学校の生徒同士で話してしまいました。しかし、台湾の生徒はそうではありませんでした。なかなか話しかけられずにいた私達に積極的に話かけてきてくれました。それも、あいさつや簡単な言葉なら日本語で話しかけてくれたのです。

私はこの学校から帰って来る時、自分から質問することがなかった事や、自分や学校の事などを伝えられなかったという事をとても後悔しました。日本語でなら積極的に話せるのに、英語でとなると話せなくなってしまいました。私も外国の人にも積極的に話しかけられるようになりたいと思いました。

また今回の学校交流を通して気づいたことがもう一つあります。それは海外へ行った時に使う英語は完璧でなくても良いという事です。単語で話しても、英語に多少の間違いがあっても、伝えようとすれば案外伝わるものだと思います。もし聞き取ることが出来ないのなら筆談

をすれば良いのです。また、書くものがないのならジェスチャーを使えば相手に伝えられます。私は最初、使っている言葉が違うということに不安を感じていました。しかし、意外にも平気なもので、もっと交流したいと思う程でした。

日常で私達は日本語を使い、台湾では中国語が使われています。使っている言葉が違う私たちを、多くの人々が知っている英語がないでくれました。交流事業のペアでの会話や学校案内の時にもし英語が全く分からなかったら、台湾の生徒達と仲良くなれなかったかもしれない。英語が少しでも分かったから、彼らと話すことが出来たのです。だからこそ私は外国の人と少しでも多く話せるように英語をもっと勉強しようと思いました。それとともに今回の研修で感じた、相手を理解し、思いやり、コミュニケーションをとろうとする気持ちや、伝えようとする気持ちを大切にもっと伸ばしていきたいと思っています。



只見高等学校2年
平野 智章さん

只見町に来て

私は今、只見町の山村教育留学生として寮生活をしています。伊南中学校を卒業し、只見高校に入学する時に寮に入りました。中学の頃から只見高校に行きたいと思い、そして部活や寮生活をしてみたいと思っていました。

私は、親元を離れ勉強や部活動をする生活が憧れで、自立もすっかりできると思っていました。しかし、実際は学校や寮の環境になれることは大変で、周りには知らない人ばかりだったので、緊張して何をしたいのか分からず戸惑うことばかりでした。部活は野球部に入りましたが、自分のプレーが思うようにできず、怪我などもあり、練習を休むことが多くなり、結局やめてしまいました。何をやってもうまくいかない自分に腹を立て、目標を見失い、何もやる気が起きませんでした。

私は学校が嫌になり、寮生活に不満も感じるようになりました。けんかやトラブルを起し、先生や親に迷惑をかけることもありました。悩みを相談したくてもそれができず、ずっと独りで悩んでいました。これが一年生の十月頃まで続き、この生活にも限界を感じていました。もう無理だと思っていたその時、担任で陸上部の顧問でもある若松先生が私に声をかけてくださいました。それは、「陸上部に入ってみたいか。」という言葉でした。私は中学の時、野球の他に陸上もやっていました。そして高校では野球を選びました。しかし、その野球もやめ、体力が落ち、やる気が全くない自分が陸上をやるだなんて無理だと思いました。今更やりたいとは思いませんでした。私は、「やりたくない。」と言いましたが、若松先生は諦めませんでした。そして私は、陸上部に入ることになりました。

「なんでやらなきゃいけないんだ。」と思いつつも練習には毎日参加しました。部員は私を含め四人だけで、野球部とは全く違った雰囲気での部活でした。練習はやはり辛く、「いきなりこんなにやるなよ。」と思いました。しかし、チームメイトの励ましもあり、辛くても練習を続けることができました。練習を続けていくうちに私は、あることに気がきました。それは、学校生活と寮生活、そして陸上楽しいと思えるようになったことでした。その時の私は、なぜそのような感情になったのか分かりませんでした。分らない事が気になり、若松先生に聞いてみました。すると若松先生は、「あなたの居場所を授業と寮だけにしなくなかった。陸上に入れば何かが変わると思った。」と私に答えました。初めはこの言葉の意味がよく分かりませんが、それが、今の自分と陸上部に入る前の自分を比較してみると答えはすぐに出ました。ただ学校に行き授業を受け寮に帰るだけの生活とは違い、陸上という部活動が始めたことで、目標を持つようになりました。人との接触が増え、周りも自分を見るようになり、そこから新しい人間関係が生まれるようになる。目標に向かって努力すること、そして一緒に頑張って頑張る仲間をもつことの大切さ、それが答えでした。若松先生はそれに気付かせてくれました。以前の自分は、気付かないうちに一人ぼっちになっていたかもしれせん。でも今では、多くの友達、先輩、後輩と楽しく学校生活を送り、寮でもしっかり自立した生活ができるようになりました。私は、若松先生に感謝しています。

初めに言ったとおり親元を離れ、全く違う環境で生活するのはとても大変です。これは、いずれ誰もが通らなくてはいけない道だと思っています。ですが、これを高校時代にできるということは、とても貴重な体験でもあり、財産でもあります。私は、只見に来て本当に良かったです。只見高校と寮生活で私は、たくさんの事を知り、学びました。またこれからの挫折したり、孤独を感じたりと様々な試練が待ち受けていると思います。しかし、その時はまたそこから何かを学びとり、良い方向にもっていけるよう頑張りたいです。只見での生活は残り一年ですが、陸上でも進路実現でも悔いの残らない学校生活を送りたいです。私は、只見で変わり続け、学び続けます。

